
ある傭兵の戦場の音色。

名ヶ共 隼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある傭兵の戦場の音色。

【Nコード】

N90560

【作者名】

名ヶ共 隼

【あらすじ】

ある兵士たちの間で有名な噂。その少年兵は一人で三個大隊を壊滅させ、全ての戦闘で、勝ってきたという。そんな噂話をしていた、二人の傭兵に降りかかる災厄とは

「おいおい、知ってるか？ 凄腕の傭兵の噂」

「何だそれ？ しらねえな」

ある紛争地帯で、ある大部隊の中の二人の兵士が、歩きながら、噂話をしていた。

二人は、泥、汗、血、その他色々なモノで汚れた、迷彩戦闘服を着ていた。

どちらとも服が違い、白人兵士は茶色の迷彩戦闘服に、網目の着いたヘルメットに、ゴムのゴーグル、黒の軍手、足甲板に、黒い長靴を履いている。

腰には、壊れにくそうなベルトの横に、実用性しか追求していないホルスターが吊るされており、中には、M92Fの拳銃が入っていた。

腰周りには、予備のマガジンと思われる物体が落ちないようにしっかりと、吊るされていた。

そして右手には、アメリカ軍正式採用銃、M4A1が握られていた。

そのM4A1は、ダットサイトに、補助グリップ、レーザーサイトという、シンプルなカスタムだった。

もう一人の黄色人兵士は緑色の迷彩戦闘服に、緑の迷彩バンダナ、動きやすさ重視の靴を履いている。

その男は両手で軽機関銃、PKMをしっかりと持っていた。

黄色人兵士は、サブウェポンを捨てたのか、手に持っている機関銃以外の武器の所持はしていなかった。

しかしサブウェポンの代わりに、PKMの弾薬がたっぷりと所持していた。

他の兵士も、装備が違う者がいる。武器も様々だ。

この部隊は戦車隊……というのだろうか、そからかしこに、戦車

が地をゆつくりと、走っている。

白人兵士も含める、戦車とその付近に居る兵士以外は、戦車を護衛するために雇われた、傭兵だろう。

だが、それぞれの顔に疲れが浮かんでいる。もう何度も戦闘をしてきたという証拠だろう。

「で、その凄腕の傭兵ってのは？」

同じ傭兵だからなのか、少しばかり黄色人兵士の目が好奇に満ちている。

「ああ、結構有名なんだが、その傭兵は十六ぐらいの少年らしい」とすると、黄色人兵士は少し暗い顔になった。

「少年兵か……俺と同じような子供が傭兵やってるたあな、この世界は非情なもんだな」

「まあ聞けって……その少年が通った戦場は、銃撃音でいっぱいだった戦場を静かにするんだって。他にも少年は一人で行動して、三個大隊を壊滅させたらしい。」

黄色人兵士は、先ほどの暗い雰囲気消して、茶化すように言った。

「へへっ、その少年が俺らの部隊に居てくれたらいいのにな」とすると白人兵士は、黄色人兵士に合わせて、少しだけ笑った。

「そうだな……ここからは、数少ない生き残りの話なんだが、そいつは意識が朦朧としている中で、銀に光る、オートマグナム銃を見たらしい。それと、恐ろしく静かになった戦場に、不意に鈴の音が鳴ったんだってよ」

「……それ、なんのジョークだよ」

「ジョークじゃないって、本当だって。だって、実際その少年を雇った軍勢はほとんどの戦闘で勝利してるし、雇った記録だって残ってる……らしい」

らしい、と言う言葉で、信用には値しないが覚えておこう……ぐらいに考えた黄色人兵士だった。

しばらく前進し、廃れた市街地の開けた大通りに通りかかる。

日は真上に上がっていて、少し暑い。

疲れがあるが、前進し続ける兵士たち。入り組んだ形なので、いつそう警戒しながら進む。

ドオン！

不意に、鼓膜が破れたと勘違いするぐらいの轟音が鳴り響いた。

その鳴った場所を見ると、一台の戦車の砲台が宙に舞い、三秒もしないうちに戦車はただの鉄くずになった。

対戦車用地雷だろう。地面に人力では到底不可能な形の穴が出来ていた。

しかし、それもつかの間、重い、低く大きい銃声が鳴り、一人の傭兵の頭を打ち抜いた。

対戦車ライフルでも使っているのか、その傭兵の頭は、簡単に体から離れ、飛んだ。

体からは、赤く、生々しい血が滝のように流れ、首の筋肉と思われるものが飛び出し、悲惨な状態を生み出していた。

ドサツ……

頭を打ちぬかれた傭兵の体が倒れる音。倒れた後に、銃声は何十発と鳴った。

ヴァン！ ヴァン！ ヴァン！ ヴァン！ ヴァン！ ヴァン！ ヴァン！ ヴァン！ ヴァン！ ヴァン！

銃声が止むと、数台の戦車が派手に大きな音を立て、爆発した。

「ああ……ああ……ああああ！」

一人の発狂した声。しかし、一発の重く低い銃声が鳴ると、その狂声は止んだ。

本能的に危ない……そう感じた黄色人兵士は、相棒の白人兵士を突き飛ばし、物陰に隠れた。

ブチュン……

後ろで聞こえた残酷的な音。恐らく、こうして避けなかったら、あぁなっていただろう。

あの発狂した兵士とは別に、無謀に立ち向かう兵士がいた。

しかしほとんどの兵士は途中に地雷を踏み、自らの身体の肉片と鮮血を撒き散らし、逝った。

運良く地雷を踏まなかった兵士も、狙撃され、一番最初に殺された兵士とやら変わりない姿で死を迎えた。

一人の兵士が、狙撃手の位置を特定したようで、ライフルに火が激しく灯った。

しかしその兵士は、三発、命中し、最早人間とはいえない状態になった。

しかし、その兵士が位置を特定したのが功を奏したのか、一斉に攻撃を始めた。

しかしその狙撃手は対戦車ライフルを、スナイパーライフルを扱っているとは思えない速度で連射し始めた。

狙撃手のいるビルを戦車が撃とうとしたのだが、その前にすべてライフルで戦車で破壊され、誰も手がつけられなくなり、この戦場は一方的な殺戮の舞台になった。

しかし、まだ戦闘を続けるものたちもいる。

もちろん、二人もその中の人間だ。

一人、また一人と打ち抜かれる。

ある者は頭が無く、ある者は腕が吹っ飛び、ある者は内臓ごと外に飛んでいたりなど、この世のものとは思えない光景が広がっていた。

しかし二人は撃ち続ける。

バババババババツ！

ドドドドドドドツ！

すでに腕の感覚はない。しかし、痺れ、痛みなんていう感情はない。

「はあああ！ はあっグウア！？」

白人兵士の足が撃たれた。黄色人兵士の目に明らかに動揺が浮かぶ。

しかしやめない。打ち続ける。

気づけば戦闘可能なのは、自分だけ。急に襲い掛かる恐怖感と、不安、そして敵の恐ろしさ。

「ああああああ！ アアグフウア！？」

しかし、そんな攻撃も狙撃手によって止められた。ドサツと倒れる音。

静か……こう言い表すのがぴったりだろう。

不意に狙撃手が立ち上がる。

背は低く、どう見ても未成年だ。

彼は銀色のオートマグナム銃を右のホルスターに入れた。

そして、少し驚いた表情になり、すぐに悲しそうな表情になる。

「……まさか、ボクと同じぐらいの年の傭兵が居たなんて……生きて、傭兵さん」

一人、狙撃手が呟く。そして

小さな、そして研ぎ済まされ、残酷な鈴の音色が、戦場に響いた。

（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9056o/>

ある傭兵の戦場の音色。

2011年3月22日22時11分発行